

徒然なるままに…54

-校内研⑤…「LGBT」とされる子どもの理解と支援ために-

平成29年1月11日
白島小学校 研修部

明けましておめでとうございます。平成29年の幕開けです。また新しい1年の始まりを迎えて、改めて月日の経つはやさを感じています。先生方は、新たな年をどのような気持ちで迎えられたでしょうか。

さて、年末には、「LGBT（性的マイノリティ）」を取り上げて研修を行いました。「LGBT」に関する基礎的な知識や子どもを取り巻く情報について、一部お伝えしました。その上で、子どもへのかかわり方を具体的に考えていただきました。今回は、この研修から見えてきた子どもの理解と支援の仕方について、次の二つのキーワードから考えたいと思います。

一つは、「知は力」となることです。男女を二分化してとらえるのではなく、身体にも、性自認にも、性指向にも、様々なケースがある、まさに、「グラデーション」であるという、性のより正しい認識を持ちます。これによって、自分のセクシュアリティを理解し、自分の存在そのものを肯定的に受け入れることができます。また、この認識は、自己を、その人にしかない違いと個性を持つ、豊かな存在であるととらえることにつながられます。結果として、悩み多き思春期に、八方ふさがりになり、自殺に至ることもなりかねないセクシュアリティの問題を克服するための知恵と、エネルギーとなる自己肯定感と自他の尊厳を大切に育てることができると考えられるのです。

もう一つは、「多様性」を持つことです。正しい性のとらえ方を知っているだけでは、様々なセクシュアリティや個性を受け入れたり、認めたりすることは、できません。ここで私たちに必要なのは、多様な見方や考え方を持つことです。

私たち大人・教師は、「小学生らしく、～させる。」とか「～なんだから、～しなければならない。」などというように、ステレオタイプの物事を考え、子どもを縛ったり、押し付けたりしてしまうことがあります。また、「この子は、どうせ～だから、無理。」とか「あの子は、いつも～だから、～だろう。」というように、子どもの一面だけをとらえ、決め付けたり、分かる・できる可能性を奪ったりしてしまうことがあります。「男（女）だから、～でなければならない。」というように、男女の二分化した枠ではかる「ジェンダーバイアス」の形成や「～でなければならない。」という理想の自分を追い求めるがばかりに、それとかけ離れた現実の自分が受け入れられなくなる、自己肯定感、有用感の欠如は、このような周りの大人の小さな頃からの刷り込み（ヒドゥン・カリキュラム）によると言っても過言ではないでしょう。

「相談しやすい先生像」の筆頭に、「日頃から、まず、子どもの発言を尊重し、丁寧に聞いてくれる。」が挙げられていました。ここで注目すべきことは、「まず、発言を尊重する」と「(とにかく)丁寧に聞く」の二つです。これらの言葉から言えることは、ずばり、私たちが「いろいろな子どもがいる」という認識を持つことが必要だということ

とです。つまり、物事や子どもの言動、特性を自分の枠の中で理解するのではなく、一旦、そこから出て、子どもの視点から物事や状況を見直そうとすることが必要なのです。例えば、たとえ理不尽でも、その子なりの言い分や思いを受け入れることとか、多くの子どもができるから、できて当たり前とせず、できない子ができるように条件をつくることなどです。このように考えると、多様な見方や考え方の土台は、子どもに寄り添うことであり、これらの積み重ねが子どもとの信頼関係を築くことにつながるのではないのでしょうか。

研修会でもお話ししたように、「LGBT」の子どもへの理解と支援は、特別なものではなく、すべての子どもにとっての理解と支援であり、どの子にとっても、生きやすく、安心して活躍できる教室、学校をつくることにつながっていると考えられます。

「LGBT」に限らず、私たちが気付かないところで、子どもたちを巡る様々な問題が起こっています。そして、それらには、教職員一人一人が意識を持ち、学校全体で取り組まなければならない時代がすでに来ているのではないのでしょうか。私たち大人・教師は、新たなものを受け入れ、方法や考え方を替えることがとても苦手ですが、今こそ、それが求められていると言えるでしょう。そのために、今一度、ご自分のこれまでの子どもに対する理解と支援のスタンスを振り返っていただく機会となれば幸いです。

【 註 】

「アライ」

英語の「Ally」（アライ）から来た言葉で、「支援者」を意味する。LGBTにおける「アライ」というと、LGBTに理解があり、LGBTを応援・サポートしていく意思のある人を指す。毎年、「東京レインボーパレード」などの大きなイベントでは、多くのLGBTと「アライ」が一緒になりパレードをしたり、交流が行われる。

「レインボーフラッグ」

「レインボーフラッグ」（英語：rainbow flag, pride flag, LGBT pride flag, gay pride flag）は、1970年代にさかのぼり、LGBTの尊厳と社会運動を象徴する旗として始まった。

現在は、赤、橙、黄、緑、青、紫の6色で構成されている。赤は、「生命」、橙は、「癒し」、黄は、「太陽」、緑は、「自然」、ターコイズは、「魔術と芸術」、紫は、「精神」と、それぞれ多様性を持った意味が込められている。

「レインボーフラッグ」は、サンフランシスコのアーティスト、ギルバート・ベイカーが考案した。セクシュアルマイノリティの偏見が現在よりも強かった1970年代のサンフランシスコでは、「レインボーフラッグ」を掲げてパレードをするのも命懸けでした。実際に共に社会運動をしていた男性が1人、何者かによって暗殺をされている。社会の目が冷ややかな中、偏見にも負けずレインボーフラッグを掲げた彼らの思いは、40年以上経った現在でも続いている。

